

# 江戸後期の草津温泉絵図の記載内容に関する考察

関 戸 明 子

- I. はじめに
- II. 草津温泉絵図の概要
  - (1) 刊行時期
  - (2) 判型と案内情報
- III. 文化7年「上州草津温泉大図」の記載内容
  - (1) 描かれた図像とその名称
  - (2) 温泉の由来・効能・道程
- IV. 後の絵図の記載内容とその変化
  - (1) 文字注記
  - (2) 構図と描かれた図像
- V. 草津温泉絵図の需要／受容
- VI. おわりに

## I. はじめに

本稿では、江戸後期に板行された草津温泉に関する絵図の記載内容——描かれている事物や記されている情報——を考察することによって、当時の草津が温泉地として、どのように案内されていたのかを明らかにする。それとともに、江戸後期における旅の普及、風景表現の在り方といった文化史的な背景をふまえながら、草津温泉絵図の特徴を論じていきたい。

本稿で考察の中心とするのは「上州草津温泉大図」である。この図には「文化七年改」（1810年）とあって、刊年を明記する図の中では最も古いものの一つである。さらに本図は判型が大きく、記事が詳細で、多くの情報を得ることができる。

同じ1810年には、旅行案内書として著名な八隅蘆庵『旅行用心集』が刊行された。本書の分量は86丁あるが、22丁を温泉の説明に充てており、湯治の仕方や注意点などを解説したうえで、国別に諸国の温泉292か所を列挙している<sup>1)</sup>。この当時、温泉に関する案内が求められていたことがわかる。

19世紀に入る直前まで、京・大坂・江戸と東海道・中山道などの主要街道を除くと、旅の案内となるべきものは少なく、日光・鎌倉・奈良などの在地板元において案内図や名所記類が刊行されていた程度であったという<sup>2)</sup>。こうした状況のなかで参詣型往来物が登場した。参詣型往来物は、関東では寛政期から文化期（1789～1818）に盛んに刊行されており、上野国に関するものでは、『上州妙義詣』（1794年）や『榛名詣』（1803年）がある<sup>3)</sup>。これらは地理的知識を身につけさせる教科書、旅における実践的な案内書として機能した。

草津を舞台にした十返舎一九の『上州草津温泉道中 続膝栗毛 十編』と『諸国道中金の草鞋 十三』の出版は1820（文政3）年のことで、この前年に一九は草津を訪れている。さらに1823（文政6）年の『上州草津温泉往来』の頭書には、温泉の濫觴、当所名勝、草津より諸方道法、温泉効能、入湯雑費、商人売物、当所産物、草津より所々温泉道法、温泉の次第といった項目があり<sup>4)</sup>、本書から実用的な情報を得ることができる。

本稿では「上州草津温泉大図」とその後

キーワード：絵図、草津温泉、鳥瞰図、風景表現、旅行案内

板行された絵図の記載内容を翻刻して整理を行う。これらを比較・検討し、江戸後期の草津温泉絵図の特徴を考察する。本稿は、拙稿「鳥瞰図に描かれた近代」<sup>5)</sup>では詳しく取り上げることのできなかつた近代以前のありようを把握することを目的としている。

## II. 草津温泉絵図の概要

### (1) 刊行時期

草津温泉を描いた絵図は、江戸後期から昭和初期まで数多く出版されている。このうち、筆者が調査したものの中で刊行時期が確認できる絵図を表1にまとめた。参考までに明治初年のものも加えている。

絵図の板元については、ほとんどの図に記載がないが、豊島屋・一田屋・三寫屋・湯本安兵衛については、刊年不明の複数の図でも板元となっている。湯本安兵衛は草津の村役人を勤め、有力な温泉宿を営んでいたが、同様に湯本平兵衛・山本十右衛門・坂上治右衛門といった名も確認できるので、これらの絵図は在地の者が主体となって製作されたと推察される。

ところで、記載内容から江戸後期の発行と判断される絵図には、刊年を明記していないものが圧倒的に多い。これは、刊年から年数が経つと、商品としての価値が下がるため、あえて記さなかつたのであろう。また、No.2

表1 本稿で対象とする草津温泉絵図の一覧

No.	名称	発行年		板元	判型	由来	効能	道程	所蔵**	備考
1	上州草津温泉大図	1810	文化7年	近江屋・豊島屋	縦	○	○	○	筆者	
2	上州草津温泉大図	1804-18	文化年間	近江屋・豊島屋	縦	○	○	○	県文	No.1と酷似
3	上州草津温泉図	1812	文化9年	記載なし	縦	○	○	○	県博・草図	
4	上州草津温泉の角力	1817	文化14年	記載なし	縦	○	○	○	県史・草誌・錦絵	図絵は円形, 番付有, 番所初出
5	上州草津温泉略絵図	1820	文政3年	記載なし	縦	○	×	○	関図	
6	上州草津温泉図	1821	文政4年	記載なし	横	×	×	×	県博	
7	上州草津温泉図	1821	文政4年	記載なし	縦	○	×	○	県文	八景有
8	上州草津温泉之図	1825	文政8年	記載なし	縦	○	×	○	県博・関図	八景有
9	上州草津温泉之図	1818-30	文政年間	記載なし	縦	○	×	○	県図	八景有, No.8と酷似
10	上州草津温泉之図	1818-30	文政年間	記載なし	縦	○	×	○	関図	図絵は円形
11	上州草津温泉略図	1827	文政10年	記載なし	横	○	×	○	県博	
12	上州草津温泉之図	1829	文政12年	記載なし	横	○	×	○	筆者	
13	上州草津温泉略図	1829	文政12年	記載なし	横	○	×	○	県文	No.11と酷似
14	上州草津温泉之図	1830?	文政13年?	記載なし	横	×	○	○	関図	年号の書き入れ有
15	上州草津温泉之図	1840?	天保11年?	記載なし	横	×	○	○	草図	年号の書き入れ有
16	上州草津温泉図*	1848	嘉永元年	一田屋	横	○	○	×	都図	図絵は扇形, 番付・八景有
17	草津温泉之図*	1849	嘉永2年	三寫屋	横	×	×	×	県図	図絵は心臓形, 番付・八景有
18	上州草津温泉之図	1853	嘉永6年	記載なし	横	○	×	○	草図	
19	上州草津温泉之図	1853	嘉永6年	記載なし	横	×	×	×	関図	
20	上州草津温泉之図	1854	嘉永7年	記載なし	横	×	○	○	筆者	
21	上州草津温泉之図	1855	安政2年	三寫屋四郎兵衛	横	○	×	○	県図・草図	No.18と類似
22	上州草津温泉之図	1856	安政3年	一田屋	横	○	○	○	筆者	No.20・21と類似
23	上州草津温泉之図	1857	安政4年	記載なし	横	×	×	×	関図	No.19と類似
24	上州草津温泉之図	1859	安政6年	丁字屋	横	×	×	×	県図	No.19と類似
25	上州草津温泉之全図	1859	安政6年	湯本安兵衛	横	×	×	×	草誌・錦絵	絵師は歌川芳虎
26	上州草津温泉之図	1863	文久3年	松野屋	横	×	×	×	関図	No.23と酷似
27	上州草津温泉之図	1874	明治7年	記載なし	横	×	×	×	関図	No.23と類似
28	上州草津温泉之図	1875	明治8年	記載なし	横	×	×	×	関図	No.23と類似

\*所蔵図書館での登録名称は「諸国温泉鑑」。備考にある図絵とは温泉街と周辺を描いた部分を指す。

\*\*県図：群馬県立図書館，県博：群馬県立歴史博物館，草図：草津町温泉図書館，関図：関西大学図書館，都図：東京都立中央図書館，県史：『群馬県史 資料編11 近世3』付図，県文：群馬県立文書館による複製，草誌：『草津温泉誌 第老巻』口絵，錦絵：『錦絵にみる日本の温泉』所収

はNo.1と同じ図で、「文化 年改」と年数の部分が空白となっている。このように、あとから空白部分に刊年を埋め込むタイプもあり、「文化九年改」と記されている図も確認できる。

草津では、江戸中期以降、郷例で客引きを禁じたが、その後も客引きをめぐってたびたび問題が起きている<sup>6)</sup>。そこで、湯治客の宿泊先を改めるため、1815（文化12）年に番所を設け、村の入り口の番所で宿泊先を書いた札を持たせて宿へ送った。表1に示した図では、入口番所は1817年のNo.4に初めてみえる。No.5以下の図すべてにおいて番所は描かれており、この存在は湯治客にとって必須の情報であったことが理解される。なかには、番所の前に「手札出ル」と記した図もある<sup>7)</sup>。このように番所の描写の有無は、刊行時期の判断基準となる。

表1からは1820年代と1850年代に刊行点数が多くなっていることが理解できる。前半のピークである1820年代は、草津温泉を取り

上げた滑稽本や往来物が出版された時期と重なっており、絵図の点数の多さは、草津への関心の高さがもたらしたといえる。

ここで、草津の有力者・湯本平兵衛が湯銭から逆算して求めた延べ入浴客数をみたい<sup>8)</sup>。図1は、延べ入浴客数の推移を示したもので、平年であれば10,000から12,000人の延べ入浴客があったことがわかる。高冷地に位置する草津では冬季は住民が里に下りたため、温泉宿の営業期間は旧暦の4月初めから10月初めまでの6ヶ月間であった。

大きく入浴客が減少しているのは、浅間山の大噴火が起きた1783（天明3）年、天明の飢饉と重なる1784年と1787年、天保の飢饉の生じた1834（天保5）年と1837年である。このように1830年代は入浴客数が低迷しており、刊年を入れた新たな絵図は製作されなかった、または発行部数が非常に少なく残存の確認が難しいと推察される。天保の飢饉はこの地方にも大きな被害をもたらし、草津村では穀類が十分に入らなかったため1837年

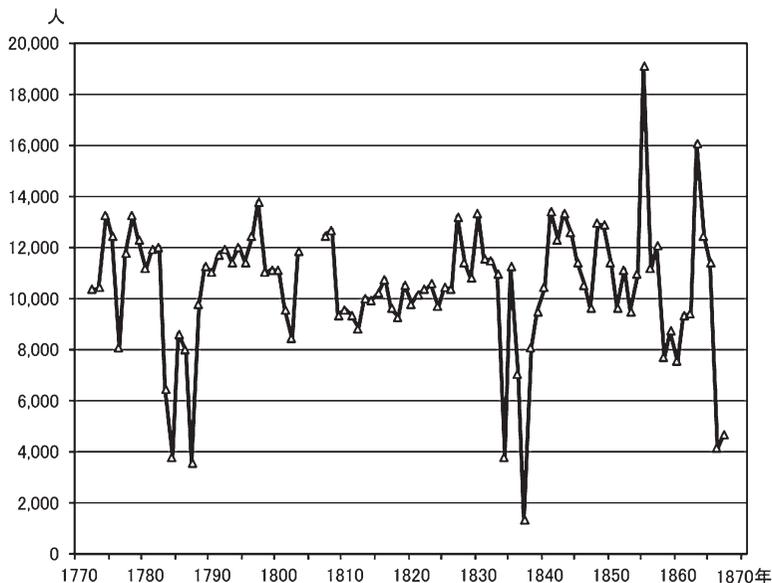


図1 草津温泉における延べ入浴客数の推移  
萩原進『草津温泉史』1948年より作成

には救民事業が行われた<sup>9)</sup>。

一方、1855(安政2)年に19,044人と入浴客数が最大となっているが、これは安政江戸大地震のあった年である。地震が起きたのは旧暦10月2日で、草津の営業が終わる時期だったので、直接的な影響はなかったであろう。1850年代後半には入浴客数は1万人以下とやや低迷しているものの、多くの絵図の刊行が確認できる。この時期は類似した図が多く、在地で継続的に製作されていたといえる。

そして、1860年代後半からの10年ほどは刊年の入った絵図が確認できない空白期間となっている。これは明治維新前後の社会変動によるものと考えられる。ちなみに、明治に入ってから10年間の入浴者数は、1878(明治11)年からの数年を平均した数値で24,150人となっており<sup>10)</sup>、江戸後期と比べて大きく増加する。

## (2) 判型と案内情報

表1に示した絵図の中ではNo.1が最も大きく、タテ74cm×ヨコ54cmである。No.1を含めて、1820年代までは縦長の図がみられるが、それ以降はすべて横長の図となっている。これらの図の大きさは、タテ30~35cm×ヨコ48~53cm程度のもので大半を占める。

縦長の図は、後述するように参詣曼荼羅によく似た構図となっている。1821(文政4)年のNo.6は、温泉街を俯瞰する横長の図であるが、建物は簡略かつ典型的な描写の繰り返しとなっており、遠近感はほとんど与えられていない。透視図法的な描写がみられるのは、1827年のNo.11である。この図では、中央にある湯畑から左上に伸びる江戸へ向かう道の街並みに、若干の奥行き表現が認められる。

1853(嘉永6)年のNo.18からNo.20の3枚は、文字注記や案内情報に違いがあるものの、全体の構図はほぼ同じである。さらに、この3枚に類似した図の刊行が続き、風景表

現の定型化が認められる。1850年代以降になると、基本的構図を模倣しつつ、部分的に表現を変えたり、独自の情報を組み込んだりした図となっており、それが製作点数の多さに結びついている。

明治前半に刊行された図もこれらに類似した図が多い<sup>11)</sup>。そうしたなか、No.26の図の右下には、「正一位白根山」とあり、1873(明治6年)の郷社選定を受けて現在地に整備された白根神社を書き込んでいる。他方で、1875年刊行のNo.27では図の左上に白根神社の図像が残ったままとなって更新されていない。このように図による差異はあるが、全体としてみれば新しい情報をよく取り入れている。

表1には、開湯伝説などの由来をまとめた記事、「のぼせ」「そうどく(瘡毒)」「ひぜん(皮癬)」「しつ(湿)」「しやく(癩)」などの共同浴場の効能、草津へ至る道程について、それぞれ記載があるか否かを示した。これによれば、1850年代後半以降には、記事が少なくなり、風景表現を主体とした図が多くなるのがわかる。

表1の備考に記したように、草津温泉絵図には、温泉街とその周辺を描く図絵の部分とは別に、温泉番付や八景を掲載する図がみられる。これらの図は、番付や八景が入ることによって図絵の部分小さくなっている。

温泉番付では、草津が最高位の東の大関に位置しており、この地位は変わることなく明治期に入っても続く。

八景は図によって異同があり、1821年のNo.7では、氷谷・殺生川原・ゆるぎ石・木の葉石・常布滝・鬼の角力場・胎内くぐり・池洲、No.8とNo.9は、胎内くぐりが鬼の泉水となっているほかはNo.7と同じである。他方、1849年のNo.17では、白根山・常湯山・殺生川原・鬼の茶釜・折目原・常布滝・西の河原・神供山となっていて、殺生川原と常布滝以外は入れ替わっている。

### Ⅲ. 文化7年「上州草津温泉大図」の記載内容

#### (1) 描かれた画像とその名称

ここでは、No.1の「上州草津温泉大図」の記載内容を見ていく。図2に全体図、表2

に図中に記されている文字注記を整理して示した。以下、文中の（ ）内の数字や記号は、図2・表2～4と対応している。

本図の上部には「文化七年改」(A1)とあり、元の図は以前より刊行されていたと考え

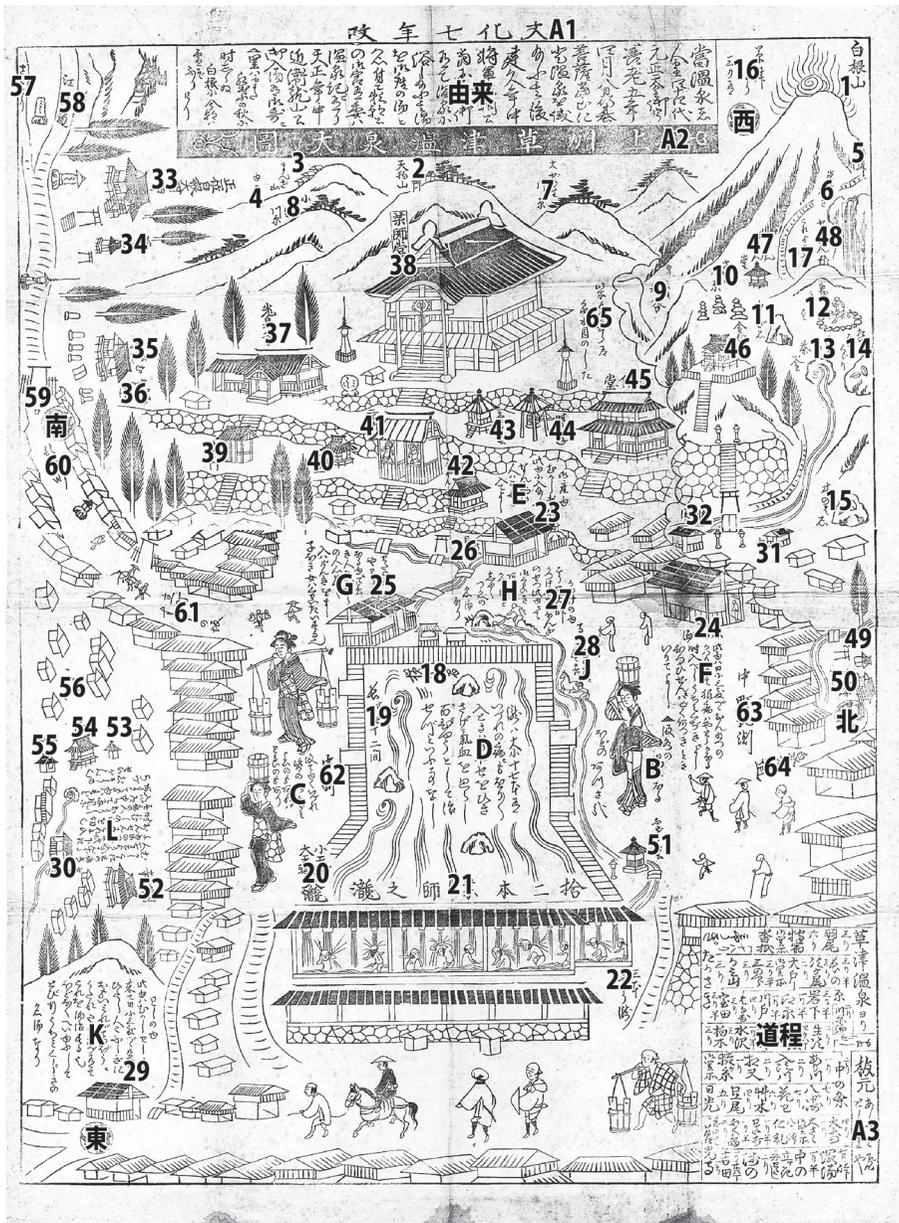


図2 「上州草津温泉大図」(No.1, 1810年)

図中の記号は表2・表3と対応

表2 文化7年「上州草津温泉大図」の文字注記

	表記	意味		表記	意味		表記	意味
A1	文化七年改		21	拾貳本薬師之瀧	12本、薬師滝	44	時のかね	時の鐘
A2	上州草津温泉大図		22	三本ふどう瀧	3本、不動滝	45	念仏堂	
A3	板元あふみ屋としまや	板元 近江屋・豊島屋	23	御座湯	御座の湯	46	金ひら	金刀比羅神社
1	白根山		24	ねつの湯	熱の湯	47	かんのん堂	観音堂
2	天狗山		25	わたのゆ	縮の湯	48	せんげん	浅間神社
3	まんざ山	万座山	26	此所目のゆ	この所、目の湯	49	神明	神明社
4	ゆば	万座温泉か	27	かつけのゆ	脚気の湯	50	雲松あん	雲松庵
5	しぶ峠	渋峠	28	馬のゆ	馬の湯	51	ふどう堂	不動堂
6	常帯たき	常布滝、帯は誤字か	29	わしのゆ	鷲の湯	52	月洲寺	
7	大ぜつ生川原	大殺生河原	30	しぞうゆ	地蔵の湯	53	大日	大日堂
8	小ぜつ生川原	小殺生河原	31	ゆ	浴場名は不詳	54	じぞう	地藏堂
9	氷谷		32	瀧の湯	琴平滝／琴平の湯	55	ふどう	不動堂
10	さいの川原	西(賽)の河原	33	正一位白根大明神	白根神社	56	ばんバ	馬場
11	ゆるぎ石		34	あきは	秋葉神社	57	さわたり	沢渡
12	鬼の角力ば	鬼の角力場	35	むえん	無縁寺	58	江戸道	
13	鬼の茶釜		36	石のかるおと	石の棺	59	入口	
14	たいないくぐり	胎内くぐり	37	光泉寺		60	新田町	
15	木のは石	木の葉石	38	薬師堂		61	立町	
16	草津より三里有	草津より三里有	39	さん門	山門		すこしの坂	
17	これよりしぶへ七り	これより渋へ七里	40	十王	十王堂	62	中町	
18	横十二間	横12間 (約22m)	41	二王門	仁王門	63	中町北側	
19	縦四十二間	縦42間 (約76m)	42	ゆぜん	温泉権現／湯前神社	64	泉水道	
20	小天狗大天狗大瀧	小天狗・大天狗大滝	43	しやか堂	釈迦堂	65	此所より金ひら道 泉水目にした	この所より金刀比羅道 泉水目の下

られる。板元は右下隅に、あふみ屋（近江屋）・としまや（豊島屋）と記されている（A3）。方位の文字は、東が左下、西が右上の白根山の脇、南が左端やや上、北が右端やや下にある。しかしこれらは目安であり、位置関係にはずれがみられる。

この図は参詣曼荼羅図に近い印象を与える。手前に湯滝に打たれる修行的な場面、背後に人びとの病苦を救う薬師如来を本尊とする薬師堂（38）を大きく描いた構図は、宗教的意味合いが強いものとなっている。そして中央にある温泉の湧出地（現在の湯畑<sup>12)</sup>）が大きな面積を占める。

図中の建物と樹木の向きは一定ではなく、人物も大小さまざまで、建物とのバランスも取れていない。湯畑の両脇には、水汲み女を大きく描いており、短歌・川柳が付される（表3参照）。「汲水の湯になるほどのあつさ哉」とあるように、草津では温泉は豊富であるが、真水は貴重で、水を運ぶ女性達の存在

は欠かせないものであった。1784（天明4）年に記された紀行文「上洲草津道法」にも「草津の水汲女、三斗入程ノ桶に水を入、頭上に戴て歩行也<sup>13)</sup>」と描写されている。

温泉街の背景には、周辺の山々や寺社、西の河原（10）付近の名所を配置している。『上州草津温泉往来』（1823年）には、当所名勝として、白根山（1）、殺生河原（7）、天狗山（2）、氷谷（9）、鬼の角力場（12）、揺石（11）、木葉石（15）、（鬼の）茶釜（13）、鬼の盥<sup>たらい</sup>をあげており<sup>14)</sup>、鬼の盥以外は、この図で確認できる。

白根山は大きな山容で、その山頂には渦と波線が取り巻くように描かれているが、これは噴火の状況を表現したものであろう。草津白根山の噴火活動に関する有史以来の最も古い記録は、1805（文化2）年に起きた白根山の湯釜における水蒸気噴火である<sup>15)</sup>。また、白根山の湯釜からは、修験者が奉納した12世紀と推定される笹塔婆が出土しており、信

表3 草津温泉絵図に記載された由来や共同浴場の効能

		No.1-1810年	No.22-1856年
	由来	当温泉は、人皇四十四代、元正天皇御宇、養老五年四月八日、行基菩薩当山に登、温泉を試給ふ、其後建久年中、將軍頼朝公、当国御有て温泉に浴し給ふ、其湯を御座の湯と名付て頼朝公の御宮有、委ハ温泉記ニ有り、天正年中、近衛龍山公、御入湯有、御歌二 ▲ 里ハまた 紅葉の秋に 時しらぬ 白根に今朝ハ 雪ぞふりけり	当温泉ハ、人皇四十四代、元正天皇御宇、養老五年、行ぎばさつ当山ニ登り、温泉を試玉フ、其後將軍よりとも公浴シ給ふとかや、委ハ温泉記ニ有
B	短歌・川柳	汲水の湯になるほどのあつさ哉	
C	短歌・川柳	汲てゆくいづれ姿の水かゞミ よいのもあれバわるいのもあり	
D	瀧の湯	瀧ハ大小十七本有、いづれの病二もをりをり入ときハのぼせをひきさげ気血を廻らし、百びやうとして治セづといふ事なし	のぼせを引きさげ諸病ニよし
E	御座の湯	むかし頼朝此ゆに入給ふ、なん病の人ハこれに入てよし	らいそう、そう毒、其外腫物一切ニよし
F	熱の湯	此ゆハ日に三度づゝおんねつのかハリ有て眼病ハやわらかなる時入べし、うちミ、くぢきニよし、しつ、ひぜんニハごくあつきときいりてよし	そうどく、しつ、ひせん、其外万病ニよし
G	綿の湯	やわらかなるゆにてよハき人、ひへしやうの人、心長く入ハげんきをまし、子なき女ハくわいたいする也	よわき人、気血をめぐらし諸病ニよし
H	脚氣の湯	こう法大師、かつけにて御なんぎのせつ、此ゆにて御くわいきあり、かつけとしゃく、つかへの名湯なり	かつけ、しゃく、つかへニよし
J	鷺の湯	此ゆハむかしわしとび来て日に三度づゝ足をひたし、人々ふしぎにおもいみれば、てつぼうこたれたるきづ有て、これを湯治する也、ほどなくへいゆにしてとび行、うちみ、くぢきの名湯なり	そうどく、うちミ、くぢきニよし
K	地藏の湯	むかしこゝに虫の病有、人一七日こもり入ニ、まんずるにゆめのつげに、此下におんせん有、これに入時ハむしのねを切也、無病の人おりおり入バ道中にて雨風にあたりてもゆハもどらづ、じそうのせいがん也	
L	松の湯		しつ、ひぜん、其外諸病ニよし
M	千代の湯		しつ、ひぜん、そうどく、万病ニよし
N	瑠璃の湯		諸病ニよし

(読点を適宜加えた)

仰の対象となっていた<sup>16)</sup>。白根山のほか、天狗山(2)、殺生河原(7)、常布滝(6)などの位置を後掲の図4に示したが、比較的近い場所にあるものが描写されている。

寺社では、薬師堂(38)の図像が最も大きく、光泉寺(37)、白根神社(33)、仁王門(41)、念仏堂(45)、金刀比羅社(46)などの建物も特徴的に描いている。宗教関係の施設が多いのは、湯治客に案内するためであろう。

無縁寺(35)の側には「石のかるおと」(36)とあるが、これは唐櫃・屍櫃(かろうと)のことで、遺体を収める石室を意味すると考えられる。1784年の「上州草津道法」には「無縁寺の庭ニ式間四方程の家アリ、その内ニ石櫃埋置、此内へ入置」<sup>17)</sup>とある。無縁寺のカロートは湯治客が亡くなったときに、親類縁

者が草津に来るまで遺体を保管する場所となっていた。

泉水道(64)の先にある雲松庵(50)は、『諸国道中金の草鞋 十三』の挿絵「草津温泉之図」に、地藏の湯の傍に「雲松庵という有。はいかいふうりうの人つねにつどいてあそぶといへり」<sup>18)</sup>とあり、絵図に示された位置とは異なる説明がある。小林一茶は、草津の黒岩忠右衛門(雲嶺庵鷺白)と交遊があり、1808(文化5)年とその18年前に草津を訪れている<sup>19)</sup>。雲松庵は、こうした俳諧・風流の人が集う場所であった。

湯畑は柵で囲われており、大きさは縦42間(約76m)、横12間(約22m)で、その周囲には共同浴場が多くみられる。湯畑の右上には源頼朝による開湯と伝えられる御座の湯

(23), その右下に熱の湯 (24), 左に綿の湯 (25) がある。柵の側にある脚気の湯 (27) は足湯となっており建物は無い。その流れの下には馬の湯 (28) がみえる。ここは文字通り馬を休めるための湯であった。下部には、2 本天狗滝 (20), 12 本葉師滝 (21), 3 本不動滝 (22) の並ぶ瀧の湯があり、湯滝に打たれる湯治客は、いろいろな姿勢をとって興味深い。また、湯畑からやや離れた場所には、鷺の湯 (29), 地蔵の湯 (30), 金刀比羅神社下に琴平滝 (32), その右に「ゆ」(31) と記された浴場がある。共同浴場は温泉地であるだけに必須の情報であり、図像も他の建物とは描き分けており、名称と効能が付されている。

## (2) 温泉の由来・効能・道程

図のタイトル (A2) の上には、温泉の由来が掲載されている (表 3)。それによれば、721 (養老 5) 年、行基が温泉を試したことに始まり、1190~99 年 (建久年中) に源頼朝が入浴し、御座の湯と名付け、頼朝の宮があると記されている<sup>20)</sup>。そして文末には、近衛龍山 (前久, 1536-1612) 作の和歌を掲載する。

近衛による草津湯治は、1587 (天正 15) 年 5 月に薬師堂に献じた 10 首の和歌を記した巻物によって江戸期から有名であった。しかし、この歌は近衛の訪れた時期と季節が合わず、1486 (文明 18) 年に草津に来浴した『北国紀行』の著者、堯恵の作が誤って伝えられたのではないかと指摘されている<sup>21)</sup>。

共同浴場には効能の記載があり、次のように案内されている (表 3)。瀧の湯 (D) は逆上を引き下げ、気血を廻らし、百病も治せないとはない。御座の湯 (E) はむかし源頼朝が入湯した、難病の人はこれに入るとよい。熱の湯 (F) は日に 3 度温度が変わり、眼病はやわらかな時に入る、打ち身・挫きによい、湿・皮癬にはごく熱いときに入るとよい。綿の湯 (G) はやわらかな湯で、弱い

人・冷え性の人が長く入れば元気を増し、子どものいない女性は懐胎する。脚気の湯 (H) は弘法大師の脚気が快気した名湯で、脚気・癩・つかえによい。鷺の湯 (J) はむかし鷺が鉄砲に撃たれた足の傷を癒やしたことがあり、打ち身・挫きの名湯である。地蔵の湯 (K) は地蔵の誓願にかかわる由緒があり、虫の病を治す。

『上州草津温泉往来』(1823 年) をみると、上記の効能に、熱の湯は腹の病、地蔵の湯は疝気と寸白せんき すばくが加わっているが、ほぼ同じ内容である<sup>22)</sup>。

草津への道程は、右下に各地の地名と距離を列挙しており、その中に「御関所」が 4 か所、「舟わたし」と「峠」がそれぞれ 2 か所に記載されている (図 3)。渡しは千曲川にあり、峠は渋峠と鳥居峠に該当する。地名は草津温泉を含めて 43 あり、その分布を図 4 に示した。この図からは、高崎が一つの起点となっており、西は善光寺、東は日光という著

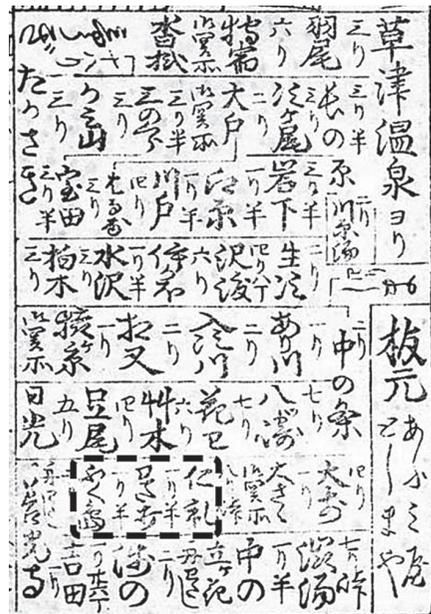


図 3 草津温泉からの道程を示した部分  
『上州草津温泉大図』(No.1, 1810 年)



表4 草津温泉絵図の文字注記の比較

番号	No.3-1812年	No.12-1829年	No.22-1856年	番号	No.3-1812年	No.12-1829年	No.22-1856年
1	白根山	白根山	白根山	33	白根神社	正一位白根大明神	正一位白根社 此処ろ浅間山見ゆる
2	天狗山	天狗山	天狗山				
3	万座山	まんざ山	万ざ山	34	秋葉神社	秋は	
4	万座温泉か	ゆば		35	無縁寺	むゑん寺	無ゑん寺
5	渋峠	渋峠		36	石のかるおと		
6	常布滝	常布瀧	常布瀧	37	光泉寺	光泉寺	光泉寺
7	大殺生河原	大セつ生川原	殺生川原	38	薬師堂	薬師堂	薬師堂
8	小殺生河原	小セつ生川原	小セつ生	39	山門	▲	山門
9	氷谷	氷谷	氷谷	40	十王堂	十王堂	十王
10	西の河原	さいの川原	さいの川原	41	仁王門	二王門	二王門
11	ゆるぎ石	ゆるぎ石	ゆるぎ石	42	湯前神社	ゆぜん	温泉宮
12	鬼の角力場	鬼の角力とりば	鬼の角力	43	釈迦堂	しやか堂	シヤカトウ
13	鬼の茶釜	鬼の茶釜	鬼の茶がま	44	時の鐘	時のかね	時のかね
14	胎内くぐり			45	念仏堂	ねん仏堂	念仏堂
15	木の葉石	木のは石		46	金刀比羅神社	金比ら	金比ら山
a1	本白根山		本白根	47	観音堂		百かん音
a2	石尊山		石尊大権現社	48	浅間神社	せんげん山	
a3	浅間山		信州浅間山	49	神明社	神明	神明
18	横十二間	横十二間	よこ十二間	50	雲松庵	雲松あん	あん
19	竪四十二間	竪四十二間	たて四十二間	51	不動堂-湯畑側	ふどう堂	▲
20	天狗滝	二本天狗たき	二本天くたき	52	月洲寺	月洲寺	月洲寺
21	薬師滝	十二本薬師の瀧	十二本薬師滝	53	大日堂	大日	
22	不動滝	三本ふどう瀧	三本不動瀧	54	地藏堂	じぞう	▲
23	御座の湯	御座湯	ごさの湯	55	不動堂-地藏側	ふどう	
24	熱の湯	ねつの湯	ねつの湯	56	馬場	ばんバ	馬ハ丁
25	綿の湯	わたのゆ	わたのゆ	57	沢渡	さわたり	
26	目の湯			58	江戸道	江戸	江戸
27	脚気の湯	かつけのゆ	かつけのゆ	59	入口	入口	入口
28	馬の湯	此所ハ馬のゆ	馬のゆ	60	新田町	新田町	新田町
29	鷺の湯	わしの湯	わしのゆ	61	立町	立町坂	立町
30	地藏の湯	じぞう湯	地藏ノ湯	62	中町		中町
31	(不詳)	湯	湯	63	中町北側	中町北側	中町
32	瀧の湯-琴平滝	瀧の湯	瀧の湯	64	泉水道	泉水みち	泉水道(2か所)
a4	松の湯	■	松の湯	65	泉水目下	せん水めした	
a5	千代の湯	▲	ちよのゆ	a13	滝下町	瀧下町	滝下町
a6	玉の湯	■	玉のゆ	a14	番所	番所	番屋
a7	瑠璃の湯	■	るりのゆ	a15	地藏の湯道	地藏のゆ道(2か所)	地藏のゆ道
a8	煮川の湯		にゑ川のゆ	a16	湯之沢	湯乃沢	
a9	白寿の湯		白寿湯	a17	天王社	天王	
a10	富の湯		とみのゆ	a18	天王町		天王町
a11	風の湯		風のゆ	a19	八幡社	八まん宮	八まん
a12	(不詳)		わきのゆ	a20	庚申	百庚申	庚申
				a21	池洲	池す	
				a22		信州 入山	

番号の数字は表2、図2、図5、図6に対応。道程の地名は除く。  
■文字が未刻のまま黒く印刷、▲文字注記はないが建物を描写。

れ以降の図でも欠かさず記載されている。  
No.12とNo.22では、万座温泉(4)、渋峠(5)、秋葉神社(34)、浅間神社(48)、大日堂(53)、不動堂(55)、泉水目下(65)が見出せない。No.1と比べると、温泉街の外縁に

ある四つの堂宇が記されていない。一方で、新たに加わったのは、石尊山(a2)、浅間山(a3)、松の湯(a4)以下の共同浴場、番所(a14)、地藏の湯道(a15)、八幡社(a19)、庚申(a20)などである。また、天王社(a17)付

近に、天王町 (a18) の地名が与えられている。

浅間山は上野と信濃の国境にあり、「信州浅間山」と表記されている。石尊山については、No.12では、白根神社の背後の山頂に石尊大権現社の鳥居と社を描いており、石尊信仰の流行とともに加えられたと考えられる。初期の例としては1825年のNo.8に「石尊宮」の注記を確認できる。

No.12にみられる池洲 (a21) は、1820年のNo.5にもあり、No.7、No.8、No.9では、別枠に描かれた八景の一つとなっている。さらにNo.15でも確認でき、1820～1830年代には、名所となっていたことがわかる。『上州草津温泉往来』(1823年)には「山中と雖も、生簀いけすに鮮魚の鱭振るあれば(中略)是を調理し、旅客の徒然を慰めり」とある<sup>23)</sup>。草津の湯は強酸性であるため、下流の河川では1964年に中和事業が開始されるまで魚類は棲息できなかった。鮮魚を提供するための生け簀(池洲)は、強調すべき場所だったのであろう。

No.22にある本白根山 (a1) は、1853年のNo.18以降の図で確認できる。常に描かれてきた白根山と比べると、本白根山の扱いはやや軽い。こうした違いは、信仰の対象として白根山が優位にあったためと考えられる。

No.22には文字数も少なく簡略ではあるが、由来と共同浴場の効能を記している(前掲表3)。由来はNo.1と同じく行基と源頼朝に言及している。効能にも大きな違いはないが、No.1にはなかった癩や瘡毒といった病が加わっている。ただし、癩病や瘡毒に効能のあることは、すでに1810年代に案内されていた。この時期の『草津浴法の手引き』をみると、例えば、御座の湯には癩病・諸眼病・諸腫物・無名の悪瘡できもの、熱の湯には諸瘡毒かさのろい・胎毒・疥癬・便毒・疝気・楊梅瘡といった病に効能があると記述している<sup>24)</sup>。No.1では、難病の人は御座の湯に入りてよしとあったので、ハンセン病や梅毒はこの難病の中に含め

ていたのであろう。

なお、道程に記載されている地名は省略したが、No.3はNo.1と同様に日光を含んでいるが、No.12とNo.22にはない。後者の2枚の図では高崎と善光寺を結ぶ範囲に縮小している。

## (2) 構図と描かれた図像

次に温泉街を俯瞰する横長の図となったNo.12とNo.22の構図をみたい。No.12を図5に、No.22を図6に示した。いずれも図の中央やや下部に湯畑を置き、その上部に薬師堂(38)、背後に周囲の山並みを描いている。

信仰の対象でもある白根山(1)はやや右上に、西の河原(10)とその周辺の名所は右端上部にある。遠く離れた浅間山(a3)を描いた図はNo.12が最も早い(位置関係は図4参照)。No.6とNo.11も横長の図であるが、両者とも図の左上の部分に案内情報を記載しており、浅間山はない。No.12の白根神社の前には「此処方浅間山見ゆる」とある(後掲図8参照)。このように浅間山は草津からの眺望が意識されるようになって、加えられたのであろう。この付近からの浅間山の眺めは、のちに絵はがきの題材となった<sup>25)</sup>。

建物のバランスは、No.1と比べれば全体として整っているが、寺社などはやや大きく描かれている。No.12の左上にある白根神社(33)と石尊大権現社(a2)は温泉街から離れた位置にあるが、神社は識別できる大きさとなっている。

岸文和は、18世紀中頃から二つの遠近法を使い分けて、空間構成において、4種類の選択肢が可能であったという<sup>26)</sup>。ここでは、その詳細にはふれないが、「伝統的」な平行遠近法と「西洋的」な幾何学的遠近法の機能的な差異を、平行遠近法は名所の地誌を観念的に【説明する】、幾何学的遠近法は名所の景観を視覚的に【記述する】と整理している。この考えに従えば、草津温泉絵図はもっぱら

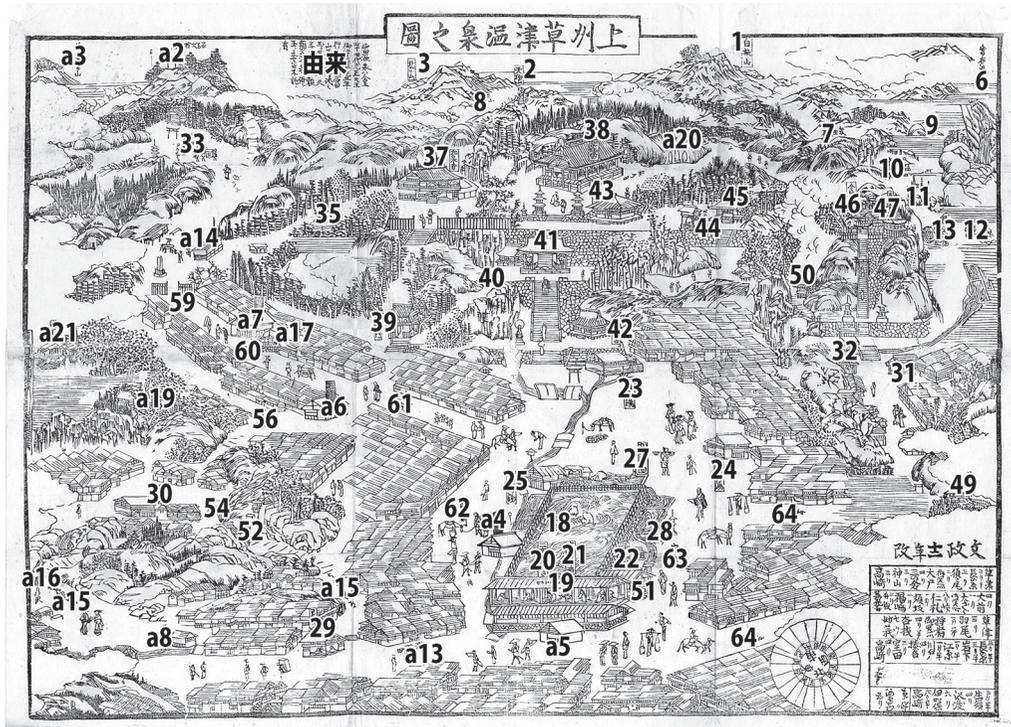


図5 「上州草津温泉之図」(No.12, 1829年)

図中の記号は表4と対応

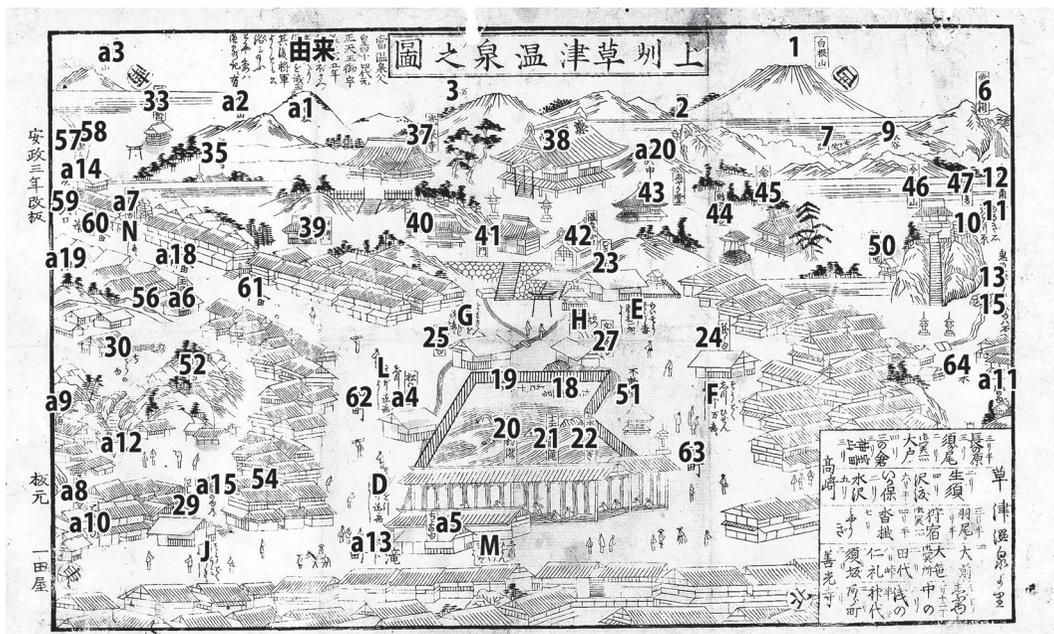


図6 「上州草津温泉之図」(No.22, 1856年)

図中の記号は表3・表4と対応

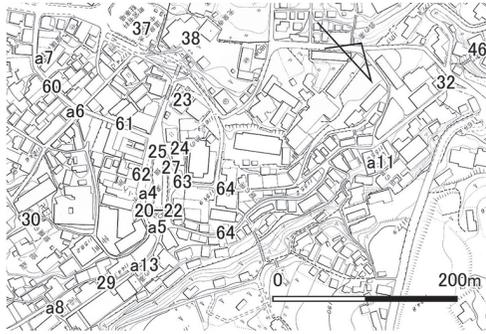


図7 絵図に描かれた図像の位置

図中の記号は図5・図6と対応  
基図は1988年修正2500分の1「草津町市街図」

名所の地誌を観念的に説明することに重点を置いているといえる。

絵図に描かれている温泉街の図像の位置を比定した図7と図5・図6を対照すると、江戸から草津に入る道に沿った新田町(60)と立町(61)は家並みが連続して描かれていることがわかる。一方、中町(62)や鷺の湯(29)へ下りていく滝下町(a13)と、地蔵の湯(30)付近は坂で距てられているので、その間には岩が描かれていたり、空白が入っていたりする。また、湯畑から右側は、泉水道(64)から金刀比羅神社(46)の石段の前を抜けて西の河原へと至る地区であるが、かなり圧縮して表現されている。なお、1849年のNo.17には、泉水道沿いにある風の湯(a11)、鷺の湯・地蔵の湯方面に白寿の湯(a9)と富の湯(a10)が記されている。こうした地区に共同浴場ができたことは、温泉街の拡大を示唆している。

建物と人物のバランスについては、No.1のような極端さはないものの、No.22よりもNo.12のほうが人物を大きく強調して描いている。それゆえ、この図では、湯滝に打たれる人びと、駕籠かき、馬子に引かれる馬に乗った客、天秤棒で荷を運ぶ人、水汲み女、芸妓と思われる女性たちなどの姿を見出すことができ、人びとが集い賑わっている様子が

読み取れる(図8)。

1819(文政2)年に草津を訪れた国学者の清水浜臣は、家居のさまは聞いていたよりも多く、「家居すへて四百軒にあまるとかや。大きやかなるか四十はかりは三階つくり也。旅人やとすつほね百五十つゝもつくりつらねたり」と記す<sup>27)</sup>。このように温泉街には400軒を超える家々があり、40軒ばかりの大きな家屋は三階立てで、旅人を宿す客室を150ずつ作り列ねているとある。No.12をみると、湯畑の周囲には3階建ての建物があることがわかる。画面に広がる密集した家並みは、草津が山中に位置するにもかかわらず、市街を形成していることを伝えている。

一方、No.22はNo.12と比べると、建物の数が少なく、全体として簡素な描写となっている。こうした構図の絵図が繰り返し刊行されたのは、製作の手間が省かれていることも大きかったと推察される。

なお『諸国道中金の草鞋 十三』(1820年)と『上州草津温泉往来』(1823年)には、湯畑とその周辺を描いた挿絵がある。その図では、温泉宿などは石が置かれた屋根になっているが、共同浴場の屋根には石がみられない。図5と図6でも共同浴場と他の建物の屋根を描き分けていることがわかる。

草津では18世紀後半から19世紀前半に、屋敷の新設や諸営業の兼業、外湯の設置などの開発が展開し、共同浴場が増加した<sup>28)</sup>。煮川の湯(a8)は1817年のNo.4以降の図にみえる。No.12には瀧の湯の手前と湯畑の左手に浴場があって、図では名称が刻印されていないが、千代の湯(a4)と松の湯(a5)である(図8)。さらに玉の湯(a6)と瑠璃の湯(a7)が加わっており、この二つの名称も未刻となっている。

No.12が出版された前年の1828年には、共同浴場の普請にかかわる文書が作成されている<sup>29)</sup>。うち1件は仲町(中町)東側、瀧の湯出口の温泉柵外に温泉小屋を建設したいと6

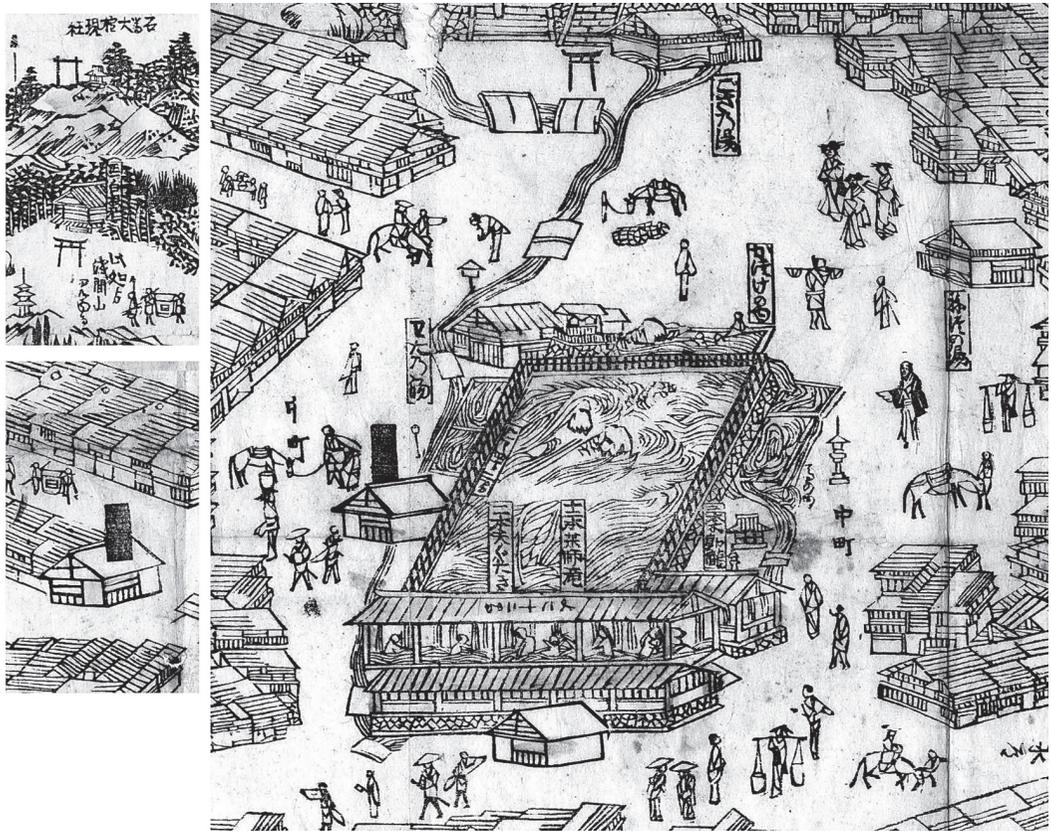


図8 「上州草津温泉之図」(No.12, 1829年)の部分拡大図

人が願ひ出たもので、もう1件は新田町と立町の道筋に湯坪を設けるために鬼の泉水(西の河原)から湯を引くことを、その工事が境内に掛かることから光泉寺に了承を求めたものである。新田町と立町は湯畑よりも高い位置にあって、その湯を引けないため、遠方の西の河原から引湯したのである。

図8をみると、新しく設けられた共同浴場は、他の部分と比べて明らかにはっきりとした図像となっている。版木の改変にはその部分の木を取り去って新たな木を入れて修正する「埋木」または「入れ木」という作業が行われる。版木は摺りを繰り返すことで摩滅するが、新しく彫り直された箇所は鮮明になる。この図では、共同浴場の新設にともない

版木を改変したものの、名称は間に合わなかったと考えられる。この図が「文政十二年改」とあるのは、このような部分的改変を意味しているのであろう。

同じ1829年のNo.13でも、この四つの浴場は埋木によって加えられていると判断できる。いずれも浴場の屋根に「ゆ」とある。No.14では、千代の湯は「信湯」、松の湯は「真湯」、玉の湯と瑠璃の湯は「湯」と記されている。浴場名が確認できる図は1848年のNo.16で、「ちよのゆ」「松のゆ」「玉のゆ」「るりゆ」とみえる。

独自の効能をもつ共同浴場の存在は、草津にとって最大のセールスポイントであったので、浴場の図像と名称は重要な情報として扱

われていたことが理解できる。

## V. 草津温泉絵図の需要／受容

草津温泉絵図は他の温泉地と比べて出版点数が非常に多い。しかしながら、出版者などの書誌がほとんど記されていないことや、関連する記録が残されていないことから、どのように製作され、流通したのかを明らかにすることは困難である。ここでは、限られた情報に基づいたものであるが、絵図の需要／受容に関する考察を行う。

絵図は温泉宿が宣伝のために配布したり、土産物として販売したりするため、製作されていたといえる。まずは土産物としての需要があったことを確認したい。『上州草津温泉往来』(1823年)の当所産物には、氷餅、氷とうふ、ゆざらしもぐさ、絵図、挽物細工、干蕨、あら木箸、糸巻、さくら皮たんざくの九つをあげている<sup>30</sup>。当時の草津では、絵図が主要な土産物と認識されていたことがわかる。

しかしながら、1755(宝暦5)年の巢萐子「草津葉泉之記」には、「草津に帰路の産物なし。三原狗脊、湯晒艾、湯花、にらふさ、是也と有」<sup>31</sup>としており、絵図をあげていない。また、四つの品ともやや辛口の評価で、草津によい土産物がないという。18世紀半ばには、まだ絵図の出版が目立っていなかったのかもしれない。

温泉地に関する絵図の出版状況全般を把握することは困難である。ここでは多くの絵図を掲載する『錦絵にみる日本の温泉』を参照したい。本書掲載の図で明治以前の刊年が示されているものは、草津の2点を含めて9点ある<sup>32</sup>。最も古い図は「豆州熱海絵図」(1681年、伊豆)、次いで「有馬山絵図」(1710年、摂津)、「奥州十五箇所温泉案内図」(1809年、陸奥)、「上州草津温泉の角力」(1817年)と続き、以下、最上高湯(1844年、出羽)、箱根(1854年、相模)、草津(1859年)、那須湯本(1862年、下野)、湯岐(1868年、陸奥)と

なる。17～18世紀の図はわずかである。

熱海と有馬の2枚の図は、当地における一枚刷りの絵図の中で現存最古とされるものである。「豆州熱海絵図」は大湯を利用する湯戸の名と屋敷割りを描いた平面図を中心に置き、その周囲に寺社・山・海などの風景を配したもので、「絵師菱河吉兵衛」とある<sup>33</sup>。この後も「熱海之絵図」(1688-1704年)、「豆州熱海湯治道知辺」(1695年)、「熱海之絵図」(1758年)の板行をみたが、温泉街は平面図となっている。このように一枚刷り絵図が早くから刊行されていたことは、熱海の広報戦略を考えるうえで興味深いと指摘されている<sup>34</sup>。そして、温泉街を俯瞰した構図は「豆州熱海温泉涌出図」(1820年)でみられる。

「有馬山絵図」には、道の両脇に簡略な建物が描かれているが、温泉街は真上から見下ろした形となっており、その周囲を取り巻くように山並みがある。続く「摂州有馬細見図独案内」(1737年)では、温泉街は屋敷割りを示した平面図となっていて、そこに浴場や寺社の建物、山の風景を組み込んで描いている<sup>35</sup>。このように熱海や有馬に関する18世紀までの絵図は、温泉街を俯瞰した構図ではなかった。

秋里籬島の『都名所図会』(1780年)に始まる一連の名所図会の流行には、名所をリアルに描いた挿絵<sup>36</sup>の果たした役割が大きく、歌川広重(1797～1858)の名所絵の種本ともなった<sup>37</sup>。さらに1803(享和3)年の鋏形蕙齋「江戸名所之絵」、1808(文化5)年の黄華山「華洛一覽図」をはじめ、19世紀に入ると都市を描いた鳥瞰図の流行がみられた<sup>38</sup>。前述のように、草津温泉を俯瞰した図は1820年代から刊行されている。名所図会の挿絵や都市鳥瞰図にみられる風景表現は、草津を描いた絵図にも影響を与えたと推察される。

草津温泉絵図は、このような背景から土産物としての需要を高めたのであろう。No.14の図郭線の左外側には「文政十三庚寅年六月

下旬 彦坂土産 深翠巢」という書き入れがある。これは土産物として入手した年月や関連事項を記録したと考えられる。

1865（慶応元）年の堀秀成「草津繁昌記」は14の見出しを立てて草津の繁栄ぶりを記述している。その一つ「夜見世」では、夜店が湯畑の左右にあり、湯宿の欄干、往来の人や商人がともした提灯で、昼にも紛うばかりと、夜の街の賑わいを描写している。そして、明日出立する人が求める土産として、氷もちひ（氷餅）、こほりそば（氷蕎麦）、白木の箸、いと巻、栗、引もの（挽き物）、郷の絵をあげている<sup>39)</sup>。最後の郷の絵が草津温泉絵図を指すと判断される。明治維新前後の刊年を記載した図は確認できていないが、絵図の販売は続いていたといえる。

絵図の受容については、わずかな手がかりであるが、二つの事例を取り上げる。

No.15の右下裏面には「天保十一年庚子八月御廻村之節 会津楡井丈之助様より貰 井筒形あつ物入」（原文改行あり）という書き入れがある。廻村してきた楡井丈之助様より貰った「あつ物」もしくは「あつ物入れ」が中に入っているとの表示である。一時的に包み紙として使われたといえるが、その絵図を大事に取って置いたことにより現存するのである<sup>40)</sup>。

次に、群馬県立文書館複製収蔵の寒河江家文書に4点の草津温泉絵図が含まれることに注目したい。そのうち2点は表1のNo.2とNo.13である。ほかの1点は「文政十三年」の書き入れのあるNo.14と同一の絵図、もう1点は刊年の記載がないものの、「バンヤ」の注記があり、1815年の入口番所設置後の絵図と判断できる。

寒河江家は、川越藩松平氏の150～200石取の中級武士であった。7代の寒河江拾兵衛元清は1770（明和7）年に生まれ、1818（文政元）年に前橋陣屋の町在奉行に着任し、藩財政の立て直し、前橋領の村々の復興のために

力を尽くし、1831（天保2）年に62歳で川越にて没した<sup>41)</sup>。このうち寒河江家は1864（元治元）年、松平氏による前橋城再築の着工にともない川越から前橋へ移住している<sup>42)</sup>。

寒河江家文書には、大坂の吉文字屋市兵衛、江戸の吉文字屋次郎兵衛が1770年に刊行した『大日本道中行程細見記大全』が含まれている。これは、タテ18cmの折り本で、長さは約9mある。冒頭に凡例があり、続いて代表的な神社や寺院の一覧、道中に必要な品などの情報をあげている。この道中図は、往還・道・船路のネットワーク、宿駅・里程・駄賃を網羅的に記載し、名所・山・坂・峠・川、城下町の城主・石高などについても注記する。元清は1804（文化元）年には伊勢山田へ、1816（文化13）年には藩主の上洛に伴って京へ出ており<sup>43)</sup>、その際に活用されたり、あるいは図を眺めて地理的好奇心を満たしたりしたと推察される。

さらに、寒河江家文書には、葉山村守殿十景（1780年、相模）、江ノ島（歌川豊広画、刊年不明、相模）、鎌倉（刊年不明、相模）、芦の湯（同、相模）、泉岳寺2枚（同、武蔵）、武州金沢（同、武蔵）、立石寺（同、出羽）の絵図も含まれており、名所への関心がうかがわれる。とくに相模は、相州の海岸警備を勤めた川越藩にとって縁ある土地であった<sup>44)</sup>。

こうしたなかで寒河江家に残された4枚の草津温泉絵図は、湯治の折に入手したものと思われる。とくに関心が強かったのかもしれない。

## VI. おわりに

本稿では、江戸後期に板行された草津温泉に関する絵図の記載内容を考察することによって、草津が温泉地としてどのように案内されていたのか、草津温泉絵図にはどのような特徴があるのかを論じてきた。

草津温泉絵図の中で刊行時期が確認できる図を整理したところ、1820年代と1850年代

に点数が多くなっていた。1820年代は草津温泉に関する滑稽本や往来物が出版された時期と重なっており、その多さは草津への関心の高さがもたらしたといえる。他方、1830年代は入浴客数が低迷し、刊年を入れた新たな絵図は製作されなかった、または発行部数が非常に少なく残存の確認が難しいと推察される。1850年代以降には、基本的構図を模倣しつつ、部分的に表現を変えたり、独自の情報を組み込んだりした図となっていて、描写も簡素で、それが製作点数の多さに結びついていたと考えられる。そして1820年代までは縦長の図がみられるが、それ以降はすべて横長の図となっている。また、開湯に関する由来、温泉の効能、草津へ至る道程、温泉番付、八景といった情報は、1850年代後半以降になると少なくなり、図絵を主体とした図が多くなっていた。

草津温泉絵図は、湯治客に案内するために、多くの寺社や西の河原付近の名所を記載していた。また、湯治客の宿泊先を改めるために1815年に設置された番所は、それ以降に刊行された図すべてに描かれている。

「文化七年改」(1810年)の「上州草津温泉大図」は縦長の図で、参詣曼荼羅図に近い印象を与える。手前に湯滝に打たれる修行的な場面、背後に人びとの病苦を救う薬師如来を本尊とする薬師堂を大きく描いた構図は、宗教的意味合いが強いものといえる。さらに図の右上には、信仰の対象である白根山を大きく描いている。共同浴場は温泉地であるだけに必須の情報であり、図像も他の建物とは描き分けており、名称と効能を付していた。この図で案内する道程は、高崎が起点となっており、西は善光寺、東は日光という著名な旅の目的地をつなぐ範囲を取り上げている。

温泉街を俯瞰する横長の図である1829年と1856年の絵図は、いずれも中央やや下部に湯畑を置き、その上部に薬師堂、背後に周囲の山並みを描く。白根山・天狗山に石尊

山、浅間山、本白根山が順次加えられていた。建物のバランスは、1810年の図と比べれば全体として整っているが、寺社や共同浴場はやや大きく描かれている。草津に入る道に沿った新田町・立町は家並みが連続して描写されているが、中町や滝下町と地蔵の湯付近は坂で距てられているので、その間には岩が描かれていたり、空白が入っていたりする。そして、湯畑から右側は、泉水道から西の河原へと至る地区であるが、かなり圧縮して表現されている。また、道程に記載されている地名は、高崎と善光寺を結ぶ範囲に縮小していた。

絵図の画面に広がる密集した家並みは、草津が山中に位置するにもかかわらず、市街を形成していることを伝えている。そして、独自の効能をもつ共同浴場の存在は、草津にとって最大のセールスポイントである。新設の浴場を改版して組み込んでいる絵図もあり、共同浴場の図像と名称は重要な情報として扱われていた。

『上州草津温泉往来』(1823年)には当所産物の一つに「絵図」が入っており、草津温泉絵図は土産物としての需要があって製作されていたことがわかる。ただし、18世紀半ばの記録では、帰路の産物に絵図をあげていない。

熱海や有馬では、草津より早い時期に絵図が刊行されていたが、それらは温泉街を平面図に描き、そこに寺社や山の風景を組み込んだものであった。こうしたなかで、19世紀初めの草津温泉絵図の出版は、縦長の参詣曼荼羅図に近い図が先行した。その後、名所図会の挿絵や都市を描いた鳥瞰図の流行などを受けて、1820年代末以降、俯瞰の構図を取り入れた横長の図となり、盛んに製作されたと考えられる。

草津温泉絵図の出版と流通の実態については、記録がなく不明の部分が多い。ほかの地域の名所絵図との比較を含めて、今後の課題としたい。(群馬大)

〔付記〕

翻刻にあたっては、行田市文化財保護課市史編さん担当の久保康顕氏のご教示を受けた。本稿はJSPS 科研費（基盤研究(C) 15K03004)の助成による研究成果の一部である。

〔注〕

- 1) 八隅蘆菴『旅行用心集』早稲田大学古典籍データベース。http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ru03/ru03\_02485/ru03\_02485.pdf (閲覧日2018年7月31日)。
- 2) 原 淳一郎『江戸の旅と出版文化 寺社参詣史の新視点』三弥井書店, 2013, 189頁。
- 3) 原 淳一郎「書物と寺社参詣一旅の往来物の分析から一」国立歴史民俗博物館研究報告155, 2010, 87-107頁。
- 4) 翻刻については、太平主人編『草津温泉繁昌誌 江戸期草津温泉資料集成』太平書屋, 2012, を参照した。原典の復刻と解説は、横山秀夫編『上州草津温泉往来』草津民芸館, 1981, にある。
- 5) 関戸明子「鳥瞰図にみる近代一草津温泉を事例として一」歴史地理学54-1, 2012, 39-53頁。
- 6) 川合勇太郎「近世の草津」(草津町誌編さん委員会編『草津温泉誌 第壹巻』草津町役場, 1976), 603-650頁
- 7) 「上州草津温泉之図」刊年・板元不明。前掲4)の附図。
- 8) 萩原 進『草津温泉史』文進社, 1948, 178-183頁。
- 9) 前掲6) 1069-1071頁。
- 10) 関戸明子『草津温泉の社会史』青弓社, 2018, 103頁。
- 11) 前掲5) 43-44頁。
- 12) 「湯畑」の名称は明治中期に定着した。鳥瞰図では1903年の図にみられる(前掲5) 53頁)。
- 13) 松代藩某「上州草津温泉道法・夢中三湯遊覧」(萩原進校注/山田武磨・萩原進編『群馬県史料集 第六巻 日記篇(Ⅱ)』群馬県文化事業振興会, 1971), 82頁。本稿では、刊本は『』, 自筆稿本・写本などによるものは「」で示している。
- 14) 前掲4) 151-152頁。
- 15) 気象庁「44 草津白根山 Kusatsu-Shiranesan」『日本活火山総覧(第4版) Web掲載版』https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/souran/main/44\_Kusatsu-Shiranesan.pdf (閲覧日2018年6月23日)。
- 16) 尾崎喜左雄「信仰関係の遺物と遺跡」(草津町誌編さん委員会編『草津温泉誌 第壹巻』草津町役場, 1976), 46-88頁。
- 17) 前掲13) 81頁。
- 18) 前掲4) 299頁。
- 19) 小林一茶「草津道の記」前掲13) 257-268頁。鷺白については、前掲8) 286-293頁。
- 20) 草津温泉に関する由緒については次で論じた。関戸明子「草津温泉の開湯伝説と歴史意識の形成」群馬大学教育学部紀要(人文・社会科学編) 66, 2017, 65-78頁。
- 21) 萩原 進「中世の草津」(草津町誌編さん委員会編『草津温泉誌 第壹巻』草津町役場, 1976), 129頁, 494-512頁。
- 22) 前掲4) 153-154頁。
- 23) 前掲4) 151頁。
- 24) 霜田尚平『草津浴法の手引き』(関西大学図書館所蔵)。前書きに「文化辛酉春三月旬一日」とあるが、文化年間に該当する干支はなく、辛未ならば1811年、癸酉ならば1813年である。なお、癩病はハンセン病に対する差別的な表現であるが、原典のまま引用した。
- 25) 関戸明子「名所絵はがきを読む」歴博158, 2010, 7-11頁。
- 26) 平行遠近法をA, 幾何学的遠近法をBとすると, (1) 全体にAを適用, (2) 前景にB, 後景にAを併用, (3) 前景にA, 後景にBを併用, (4) 全体にBを適用, の4種類があるという。岸 文和「『風景』を描く理由——【助言する】名所絵」『絵画行為論——浮世絵のプラグマティクス』醍醐書房, 2008, 267-294頁。
- 27) 清水浜臣「上信日記」前掲13) 308頁。
- 28) 高橋陽一「近世の旅先地域と諸営業—上野国吾妻郡草津村を事例に—」『近世旅行史の研究—信仰・観光の旅と旅先地域・温泉—』清文堂出版, 2016, 276-301頁。前掲10) 36

- 39頁。
- 29) 前掲6) 685-687頁。
- 30) 前掲4) 154頁。
- 31) 巢萑子「草津薬泉之記」前掲4) 60頁。
- 32) 木暮金太夫編『錦絵にみる日本の温泉』国書刊行会, 2003。八景や人物主体の図は除く。図47の箱根七湯絵図は注記に「天保13年(1842)」とあるが、図中では「嘉永七年」(1854)とみえる。
- 33) 1690(元禄3)年刊行の『東海道分間絵図』では、菱川吉兵衛(師宣)は街道の風景を描き加えている。
- 34) 松田法子「近世熱海の空間イメージと建築」(熱海温泉誌作成実行委員会編『市制八〇周年記念 熱海温泉誌』熱海市, 2017), 85-95頁。「熱海之絵図」(1758年)以外の図は本書の口絵に掲載されている。
- 35) 神戸市立博物館編『有馬の名宝一蘇生と遊興の文化一』神戸市立博物館, 1998。本書所収の図と作品解説を参照した。また、有馬温泉に関する地誌・紀行などの写本・版本等については、下記に掲載の表に示されている。新修神戸市史編集委員会編『新修神戸市史 歴史編Ⅲ 近世』神戸市, 1992, 208-209頁, 436頁, 863頁。
- 36) 鶴岡は、谷文晁の「公余探勝図」(1793年)の実景表現について、俯瞰的な視点を採用して地誌情報を詳しく描き込んだ名所図会の挿絵や、古川古松軒の絵地図を基盤として、地形を正確に記録するため、透視図法や陰影法を加えて、実景の再現に近づける画期的な描法を生み出したと論じている(鶴岡明美『江戸実景図の研究』中央公論美術出版, 2012, 19-73頁)。
- 37) 大久保純一『広重と浮世絵風景画』東京大学出版会, 2007, 77-125頁。
- 38) 矢守一彦「地図と風景画のあいだ」『古地図への旅』朝日新聞社, 1993, 25-57頁。岸文和「菊屋版《うきゑ京中一目細見之圖》について一はじめての「都市鳥瞰圖」一」國華 1214, 1997, 5-15頁。
- 39) 堀秀成「草津繁昌記」前掲4) 215-216頁。
- 40) No.15には、番所はあるが、千代の湯や松の湯はないので、1816~1828年頃の刊行と考えられる。この図が1840年に包み紙として利用されたことになる。
- 41) ①「元清覚書」寒河江家文書(群馬県立文書館複製収蔵PF8407/11/122), ②県立文書館友の会蛎魚の会『文政二巳卯年正月元旦より 前橋御用留 寒河江元清』県立文書館友の会蛎魚の会, 1990, 3-18頁。
- 42) 群馬県史編さん委員会編『群馬県史 通史編 6 近世3』群馬県, 1992, 114-115頁。
- 43) 前掲41) ①「元清覚書」。
- 44) 川越市庶務課市史編纂室編『川越市史 第3巻 近世編』川越市, 1983, 374-408頁, 530-547頁。